

〔能楽〕 研究展望(昭和61年)

山中, 玲子

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

204

(終了ページ / End Page)

216

(発行年 / Year)

1988-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020392>

研究展望（昭和61年）

山中 玲子

能・狂言研究の動向には、ここ数年目立った変化はない。すなわち、能楽史研究においては江戸時代に関する研究の増加・充実が、作品研究の分野では、個々の作品分析にとどまらず能作史の流れの中で位置付けを重視していく傾向や、演出研究・技法研究による別の側面からのアプローチ、周辺の説話研究の成果による新しい視点などが、能楽論研究ではその数の減少が、ここ何年かにわたっての傾向である。また狂言の研究では、資料研究と個々の作品の形成論の二本立ての形が続いている。

そのような中で61年を特徴づける出来事として、単行本研究書の充実はずいぶん挙げねばならないであろう。多年にわたる研究がようやく結実して刊行された書、待望の論文集、入手困難だった古書の復刊等、内容は様々であるが、必読文献とも言うべき本が集中して出版されたのが61年であった。

以下では、まず単行本を発行月日順に紹介した後、雑誌論文等を、作品研究・能楽史研究・能楽論研究・特集雑誌・狂言の順に概観していきたい。論文題目中の曲名をすべてへんがで囲み、副題を統一した形で掲出しているなど、若干編集の手を加えていることを、お断りしておく。

〔単行本（含、シリーズもの）〕

『元和日記』（高島幸次編。同朋舎。1月。菊判 四四五頁。一〇〇〇円）

主として西本願寺所蔵の史料を集成・刊行する「本願寺資料集成」の一冊。龍谷大学蔵の資料も合わせて、元和二〇十年の日記・記録三十三点を収録。能楽関係の記録も含まれている。

『建内記 十』（大日本古記録。東京大学史料編纂所編。岩波書店。1月。A5判三六八頁。一一〇〇〇円）

文安四年（二四七）十一月から康正元年（二四九）八月までの分。

『世阿弥へまなざし』の超克』（高野敏夫。河出書房新社。1月。B6判二七二頁。二八〇〇円）

世阿弥の生き方・人間像を再構成し、観客のまなざしとの関係を重視して彼の伝書を読み解く。

『中世古今集注釈書解題 五』（片桐洋一。赤尾照文堂。1月。B6判五八七頁。一四〇〇〇円）

解題篇—I「毘沙門堂本古今集注」に類する注釈書、II真観一派の古今和歌集注釈、III「毘沙門堂古今集注」に関わる秘伝

書二種——と、資料篇—宮内庁書陵部本『古今集抄』(鷹二六三)所引「聞書」、校訂古今和歌集灌頂口伝、「校訂玉伝深秘卷」——から成る。本巻で最後のはずだったが、もう一冊補遺篇を刊行して、46年以來の大業も完結する由。

『幸若舞曲研究』第四卷(吾郷寅之進・福田晃編。三弥井書店。2月。A5判五七五頁。九〇〇〇円)

論攷編—「幸若舞曲における和歌の性質」(岩瀬博)・「幸若舞曲(曾我物)の方法」(福田晃)・「幸若二題」(西脇哲夫)・「大織冠」の成立」(阿部泰郎)・、注釈編—「木曾願書」「敦盛」「奈須与一」・、資料編—京都大学文学部図書館蔵『舞の本』、大方家本「新曲」「高館」、上山宗元本「和田宴」「夜討曾我」「伏見常盤」の解題と翻刻—から成り、巻末に「幸若舞曲研究文献目録(四)」を載せる。

『能楽史新考(二)』(表章。わんや書店。3月。A5判六三六頁。九五〇〇円)

54年刊の『能楽史新考(一)』に続く著者の第二論文集。前冊の後を承け、昭和38~46年に諸誌に発表した主要な論文を収載。第一部「世阿弥とその伝書」、第二部「能・謡の作品研究」、第三部「能楽史上の諸問題」、第四部「資料の紹介と考察」の四部分に分かれ、前冊同様、旧稿の形を残したまま、本文中に補足・補訂を加え、各論考の末尾には詳細な補説を付して、自説の補強や見解の変更に言及している。「世阿弥生誕貞治三年説」をめぐる論(第一部)や、『観世』に載せた作品研究の数々(第二部)、『節章句秘伝之抄』や明和改正謡本に関する考察(第三部)等々、

本冊に収められた諸論考は、「能の研究はこうやるものか、こんな事もできるのか」と、感動しつつ読んだものが多い。中でも「恋重荷」の歴史的研究」は、諸本を精査して詞章の異同を調べ、古資料に基づいて昔の演出を探る作業を積み重ね、次々に新しい事実を掘り出す手際といい、知り得た事実をより大きな問題につなげる展望といい、能の研究を志す者にとって何とも刺激的な論文だった。「室町末期の謡伝書の性格」は、読む者の頭が混乱しそうな錯綜した内容であるが、それは扱う対象の性質が錯綜しているからである。そうした複雑な内容を詳細に調査した根気はもとより、その調査結果を論文にまとめあげ腕力?の強さにも敬服する。曲名・人名・書名の索引付き。

『謡曲集中』(伊藤正義校注。新潮日本古典集成。3月。B6判五〇九頁。二五〇〇円)

光悦本を底本とする全三冊百番の注釈書の第二冊。〈清経〉から〈朝長〉まで(五十音順)の35曲を収める。前付、本文行間の注記、頭注、巻末の各曲解題等の方針は58年刊の上巻と同じ。付録として、能楽諸流一覧の他、能楽全書第四巻『能の演出』の解題掲載の資料による「能面一覧」「装束一覧」「小道具・作り物一覧」を付す。その面や装束の名にほとんど振仮名を添えて、前付の衣装付等に振仮名のない不便さを補うよう配慮されている。各曲解題は、〈融〉の項の「融の大臣の能」の内容推定など俄かに承服しがたい説もあるが、前冊と同様、大胆で刺激的な指摘が多く、〈自然居士・俊寛・卒都婆小町〉等、伊藤説をめぐる論議の活発な曲もある。今後も、本書の解題が火付け役となる

り、その批判的継承による新しい作品研究が続出するであろう。
『日本芸能史論』全三冊(林屋辰三郎。淡交社。3月。A5判。三五八・三七〇・三一〇頁。各三八〇〇円)

著者の芸能史研究五十年を記念しての刊行。第一冊「座の環境」は、『日本演劇の環境』(昭和22年)と『かぶきの成立』(24年)を、「本文に若干の削補と補註を加え」て収め、関連する論考三篇をも加える。第二冊「数寄の美」は、I人間と数寄、II数寄の道、III中世の美と形、の三章に分かれ、日本芸能を「数寄性」という面から考察した論考を収める。第三冊「手の芸術」は、I「創造と伝統」で家元制度を論じ、II「幽玄の芸術」では神事芸能について語り、III「美術展示の芸能」には、著者が京都国立博物館長在職中に目録・図録等に執筆した文章が集められている。各巻末に初出一覧付き。

『世阿弥』(堂本正樹。劇書房。4月。B6判八〇四頁。五八〇〇円)

書き下ろしの世阿弥評伝。本文は「父を育てた時代」「父と子の時代」「春の時代」「秋の時代」「冬の時代」の五部に分かれ、補説として一五〇頁を越す「私的ノート」を含んだ恣註を付す。本書については表章氏による書評『サンデー毎日』7月27日号)があり、世阿弥に夏の時代(芸能界の第一人者だった時代)を認めない著者の立場への異論も示されているが、表氏も言われるように、「主観でスッパリと割り切った新見を遠慮なく提出していること」は「大きな魅力」である。「私的ノート」を含んだ恣註」は、「恣註」だけあっていっそう著者の個性に彩

られ、読者が疲れる弊がなきにしもあらずであるが、全体が刺激的で、そこだけ読んでも面白い。巻末に元頼本『実方』の翻刻と、重要事項年表・索引付き。

『貞享年間大蔵流間狂言本二種』(能楽資料集成)15。田口和夫校訂。わんや書店。4月。B6判二四九頁。四〇〇〇円。会員頒価三五〇〇円)

能楽研究所蔵「貞享松井本」全十冊の内の七冊の翻刻。紀州藩狂言方松井兵右衛門書写の同書は、間狂言一八八番の詞章に簡単な装束付・型付を加えており、曲数の多さと記述の詳しさは同時代に類がない。間狂言研究の基礎資料。

『狂言の美学—演劇学的アプローチ』(小島元雄。創元社。4月。A5判二三三頁。二八〇〇円)

演劇学研究者の立場から、日本の演劇としての狂言と西欧の演劇とを比較・考察した書。第一部「日本のファルス(笑劇)・狂言の特質」、第二部「英国のインタード(初期喜劇)」、第三部「狂言固有の演劇美」。

『謡曲選集』(岩波文庫。野上豊一郎編。岩波書店。4月。四六一頁。六〇〇円)

昭和十年初版本の復刊。〈翁〉以下三十番を収める。ワキの文句は下掛り宝生流、アイのセリフは狂言方(大蔵・和泉のいづれか)に拠り、舞台上の人の出入りや簡単な動きも記し、前付に登場人物・装束付・場面・季節を記す。

『マンガ能百番』(渡辺睦子著・増田正造解説。平凡社。6月。B6判四〇九頁。九八〇円)

現行曲百番を、それぞれ12コマの漫画で解説。別にその曲のテーマに触れる短い文章を添えるが、それが秀逸。

『千野の摘草』(森田操。ぺりかん社。8月。A5判三三五頁。六八〇〇円)

昭和12年刊行の本の増補復刻版。本文は、雑纂の記事の「みきぎ草」、名人たちのエピソード主体の「よしあし草」、秘事・口伝を集めた「みのり草」の三部に分かれ、詳細な解説と幾通りにも引ける索引が今回増補された。能の習い事や故実に関する記事が多くて有用な本書にとって、行き届いた索引は有難い配慮で、格段と利用しやすい形の復刻になっている。

『週刊朝日百科 能と狂言』(西野春雄編。朝日新聞社。8月。三二頁。五〇〇円)

「日本の歴史」の17号。多数の舞台写真の他、面・装束・演能凶等もすべてカラーで収め、鑑賞の手引き、歴史、観・世・元雅三代の作品の特徴などを、コンパクトにまとめている。

『能劇の研究』(横道萬里雄。岩波書店。9月。A5判四七九頁。六四〇〇円)

著者が昭和28年から53年にかけて諸誌に発表した論文の中から、能楽関係のものとして「能本の戯曲性」「夢幻能について」「能本の構造」「能の音楽」「囃子事」「能と能舞台」「狂言と能」「黒川能」を、能と関連の深い他の芸能についての論考として、『文秋譜』の能音階」「能における『越天楽今様』の撰取」「早歌の新旧」「長唄鳴物の古型」「二月堂処世界日記注解―長禄本処世界日記―」を選んで加筆・整理し、「序に代えて―芸能研究

のありかた」と、「楽劇研究の将来―跋に代えて―」を新たに書き下ろしてまとめた書。先の表氏の論考と同様、それを読んで勉強してきたなつかしい論が多いが、今回読み直してみても、博識と芸能全体を見渡す広い視野や深い洞察力に改めて圧倒された。本書を読めば、「能だけ見ていたのではだめだ」ということはよく解るし、国文学系の研究者の研究態度に対する氏の苦言も尤もだとは思ふ。しかし正直なところ、氏から教えられる能関係の知識を消化するのに精一杯で、他の芸能にまで目を配って能との関連を見出すなど、至難の業である。と諦めの気持が先立つが、氏のように一人で楽劇全体を覆うことはできないにせよ、せめて多くの分野の研究者の協力によって氏の方法を継承する努力はなさねばなるまい。

『日本文芸史 III・IV』(小西甚一。講談社。4・10月。A5判。六〇一・五八九頁。各四三〇〇円)

第III冊は、「中世第一期と第二期の間」「中世第二期―『道』の時代」「中世第二期の形成」「中世第二期の達成」の四項に分かれ、最後の項で、「一 漢詩文の再興」「二 和歌の深化」「三 連歌の熟成」「四 和文から準和文へ」「五 和漢混淆文の普及」と並んで、禅竹の時代までの「六 能の成長と開花」が説かれる。第IV冊は、「中世第二期と第三期の間」「中世第三期―『情理』の時代」「中世第三期の形成」「中世の晩秋へ」の四項に分かれる。第二期と第三期の間にあたる十六世紀後半を「連歌におけるのと同様、能の完成期と認め」る立場を採り、そういう「雅の完成」に対する「俗の興起」として、狂言の形成にも論及する。

十七世紀半ば以降の「能と狂言の精鍊」についての言及もある。日本文芸史上での能・狂言の位置付けに関する最新の学説として注目される。各巻末に、索引・年表と、研究文献・引用資料の一覧を付す。

〔雑誌論文、その他〕

61年には、世阿弥以後の作者・作品に関する研究が目立った。

三宅晶子氏「世阿弥からの出発―元雅・禅竹の時代」(『能研究と評論』14、5月)は、世阿弥以後の新風の能に関して氏が続けて来られた一連の考察の総括となる論考。世阿弥晩年期の能として〈鶴・当麻・砧〉を、元雅周辺の能として〈朝長・経盛・蟬丸〉を、禅竹時代の能として〈俊寛・景清・善知鳥〉を採りあげ、世阿弥以後の能作の新しい動きの中で「幽玄性」がどう処理されたかを検討し、元雅・禅竹によって完成された心理歌劇としての現在能が、世阿弥以後さらに深化した能の一側面であると結論する。世阿弥と禅竹では幽玄の概念そのものが違うとの指摘をも含む。三宅氏には「禅竹時代の〈善知鳥〉」(『鍊仙』5月)もあり、この曲を碎動風の能としてだけではなく、人間の内面に注目した禅竹期の能の一つとして捉え直すべきことを言う。

国立能楽堂は「春の特別展示」を禅竹の特集とし、金春系の伝書・謡本・装束などを展示したが、「金春禅竹 人と業績」と題したパンフレットは、出品解説の他、表章氏「金春座と禅竹の史的位置」、三宅氏「禅竹の業績」の二論考と、三宅氏作成の「室町中・後期の能一覧」を収める。三宅氏稿は禅竹が能楽論

においても心を重視したことを指摘する。

竹本幹夫氏「観阿弥・世阿弥・音阿弥―能役者として」(『国文学』9月)は、本格的論文ではないが、観・世・音三代の作品や所演曲の検討を通して、三人の役者としての特徴を探り、禅竹と同時代を生きた音阿弥の「さまざま新傾向の当代作品を積極的に演じ、人氣曲として定着させた功績」を評価する。音阿弥の評価も、世阿弥以後への注目と通じるものであろう。

さらに後代の、禅鳳・信光に目を向ける論考も多く出た。山本和加子氏「信光の作能法と間狂言をめぐる試論―八玉井と八船弁慶を中心」(『実践国文学』3月)は、信光の風流能の作法の特徴と、その中でアイの役割について考察した論。結論は慎重で、狂言方の演技を見せるために一曲を三場に構成していることや、靈的人物を登場させながらも、複数の役者による共同演技を見せ場とする現在能形式の歌舞能であることの指摘に抑えているが、風流能でのアイの活用の有効性論証の部分が面白かった。アイは舞台への出入が自由でスピーディーな場面展開が可能といった、実際の舞台的制約まで含めて考えて行く視点は、この時代の能の考察にかなり有効なものではないかと思う。

信光に対する関心は間狂言への関心にもつながる。岩崎雅彦氏「末社アイ考―間狂言成立史の一側面」(『国学院雑誌』3月)は、世阿弥時代には末社アイが存在しなかったこと、末社アイの創始者は信光で、〈紅葉狩〉の「武内の神」がアイに登場した最初の末社神であること、〈難波〉のアイ「梅の精」も同時代の成立で、これも信光の手に成る可能性が考えられること等を指摘する。

世阿弥時代に〈難波〉のアイに梅の精が出たかも知れないという疑問は拭いきれないし、〈金札〉や〈雨月〉への言及が簡単過ぎるようにも思われるが、正面から扱われることのなかった末社アイの成立過程について、現行の末社アイの分類から始めて本格的に検討し、一つの説を提示したことの意義は大きい。先の山本氏稿にも明らかのように、室町後期の能を考えて行く時にはアイの機能を無視できないのである。

樹下文隆氏「信光の能〈巴園〉について」(『文学史研究』27、12月)は、信光作と考えられる〈巴園〉についての素材研究である。〈巴園〉を、「橘中叟」の故事に「葛波竜」の話を取り込み、「菊水」に代表される「御代の祝福」を結び付けた作品と捉え、そのような結び付きも、橘実の中に居る仙人に子方が登用されていることも、当時の説話享受の広がりからは自然であるとす。素材やその享受状況について綿密に調べてゆく方法は確実だし、教えられる事が多いが、前半の素材研究の重厚さに比べて、後半の作品論は簡単にまとめ過ぎている印象を受けた。最後の五行ほどで言われる、イメージの連想を積み上げていく詞章制作の達成点が〈遊行柳〉で示されるという事も、演出の奇抜さや題材の新鮮さが次の世代に受け継がれて行く事も、その事自体は否定できないが、どれも重要な問題だけに、〈巴園〉だけでなく他曲の検討も合わせて論証して行く必要がある。

西瀬英紀氏「室町後期の謡曲作者とその周辺—金春禅鳳の時代と作品」(『芸能史研究』95、10月)は、禅鳳の業績を、謡文化の成立、東大寺との結び付き、庶民信仰や唱導文芸との関わり

の中で考えようとした論であるが、博識が災いしてまとまりが悪くなった憾みがある。東大寺過去帳のことは別にまとめた方がよかったのではあるまいか。禅鳳作の各曲について、作能法を二十行程度でまとめてしまうのも乱暴であろう。〈初雪〉の典拠についての説は興味深いが、〈一角仙人〉に触れて一気に「信光・禅鳳・長俊」といった、唐物の創作を好んだ作者の典拠の仕入れ先の多くは、民間に広まっていた唱導の場だったのでないだろうか」となどと推断するのは、無理であろう。信光の能の素材に関する樹下氏の研究成果との関わりも問題になる。

表きよし氏「壇の浦合戦を素材とした能—碓潜・先帝・大原御幸」(『中世文学』31、5月)も同じ時代の能を問題にしている。壇の浦合戦を素材とする作品が信光や禅鳳の時代に作られるようになったことを確認した上で、副題の三曲が密接な関係を持つ事を論証し、それは先行曲の良い部分を積極的に取り入れて新しい能を作りだして行く室町後期の能作方法の現れである事や、安徳天皇入水・教経奮戦、知盛入水など、異なる情趣を持つ場面が連続して展開するこの合戦が、舞台上の変化の大きい解りやすい能を作ろうとした当時の作者たちの要求に合う素材だったことを指摘する論で、知盛の奮戦が〈船弁慶〉に通じるなど、個々の作品検討が室町後期の作能全般の特徴に結び付いてゆく点が面白かった。

世阿弥やそれ以前の時代を扱った作品論も、もちろんあった。天野文雄氏「能と語り物—能の曲舞撮取をめぐる」(『解釈と鑑賞』4月)は、曲舞を能一曲中に最初に採り入れたのは世阿弥と

する近年の説に対し、従来通り観阿弥創始と考えるべきことを述べており、世阿弥創始説と一体の「自然居士」クセ増補説への反論にもなっている。また同氏「形成期の能―物狂能の場合」(『国文学』9月)は、能の物狂の意味を検討し、〈嗟峨物狂〉の構想を推定しているが、〈百万〉の古形と同内容と見て、シテは曲舞女で「地獄の曲舞」が曲中で舞われたらうとの結論は、確実な根拠がなく、どちらとも言えない気がする。なお、古作の物狂については、竹本氏「丹後物狂」の作風(「橋の会」21回公演パンフ)11月)もある。

竹本氏「劇文学(能・狂言)の形成と完成―詞章の固定化をめぐって」(『解釈と鑑賞』6月)は、実質的には〈求塚〉の形成に関する論。世阿弥によって現行の形に整えられたらしいとの表章氏説を追認・補強した上で、観阿弥作の原曲は特異な内容の求塚伝説を忠実に描く能ではなかったかと推測し、世阿弥の改作として、幽玄な見せ場としての若菜摘みと、執心物の必然としての地獄の苦患を新たに取り入れたことを推定する。『鏡仙』所載の同氏の次の二篇も同時代の作品に関する論である。すなわち、「作り能の初期形態」(6月)は、恋を重荷に例える和歌的修辭を発想の契機とし、和歌的秀句をちりばめてはいるが特定の和歌説話を典拠に持たぬ〈恋重荷〉を、後の作り能の初期形態と把握する。「世阿弥自筆本(雲林院)以前」(12月)は、金剛権守が舞った古作(雲林院)は一場物の尉をシテとする能で、それを世阿弥が碎動がかりの鬼能に改作したものかと推定している。

三宅晶子氏「複式夢幻能の成立」(『国文学』9月)は、古作の

能では現在の場へ幽霊が直接現れる場合が多いことを指摘し、〈海士〉〈鶺鴒〉のような、第三者的に生前を物語った後に本性を明かして仕方話を演じる形を、単純な複式夢幻能の一步手前の作品として位置づける。説得力のある論と思われる。

山中玲子「女体能における世阿弥風の確立―松風〉の果たした役割」(『能研究と評論』5月)は、貴人でも芸能者でもない女性をシテとし、「形見の舞」の趣向を詞章に反映させない〈松風〉の作法の新しさと、それが「世阿弥風」の確立に果たした役割を論じたもの。同誌同人の合評会では批判が多かった。

原田香織氏「昔男に移り舞―井筒〉の作品世界」(『日本文芸論叢』5、3月)は、〈井筒〉を「執心」の能と捉える立場にそもそも疑問を感じる。

『観世』の作品研究は、1月が浅見和彦氏〈金札〉、3月が島津忠夫氏〈鶴〉、10月が徳江元正氏〈松虫〉、11月が竹本幹夫氏〈関寺小町〉、12月が小田幸子氏〈岩船〉の五曲だった。竹本氏稿は、〈関寺小町〉を小町という題材の幽玄化を目指した作品として把握し、『花伝』初期の世阿弥の思想を具体化した能である点に最大の意義があるとする。本曲に見られる夢幻能的手法の指摘と、舞の段の構造に関する〈松風〉との先後関係の検討が興味深かった。小田氏稿は、原〈岩船〉の形態を推定し、前場はシテ老人とツレ若い女が、後場はシテ竜神とツレ天女が登場し、後場には船の作り物を出して竜神が綱を引いてそれを動かしていた、と想定する。また、岩船伝承、浜の市伝承を紹介した上で、〈岩船〉に見える祝言能としての性格にも触れ、〈岩船〉を世阿弥時

代以降の「風流能的脇能」と捉える。島津氏稿は、『平家物語』諸本の異同の問題に触れつつ謡曲〈鶴〉の詞章との関連を考察している。徳江氏稿は、熊沢れい子氏が「古今集と謡曲―中世古今注との関連において」(『国語国文』昭和45年10月)で述べた説を再確認しつつ、〈松虫〉と関わる同種の説話を紹介し、「児物語とは本質を異にする成年男子同士の恋情」という同曲の設定の珍しさを指摘する。浅見氏稿も同じく熊沢氏稿に拠るが、熊沢氏が〈金札〉の典拠として挙げた『玉伝深秘卷』の「金札伝」以外に、「いざこに」の歌にまつわる「宮居、宮作り、そして国贅めを含む託宣の物語の伝播」を想定される。〈金札〉はかつては観阿弥作と考えられていたが、その根拠とされる『五音』所載の「伏見」を独立の祝言謡と見る立場から、最近は否定的見解もある。その点についても触れてほしかった。

次に出典研究の類を挙げる。田尻紀子氏「謡曲における『源氏物語』の受容―〈半蔀〉と『小鏡』『大綱』」(『滋賀大國文』24、6月)は、〈半蔀〉に撰取された『源氏物語』の本文を探る、素材論。『三道』の記事を現行の〈夕顔〉と結び付けて、同曲を世阿弥グループの能とする論には疑問があるが、「山がつの垣は荒るとも：」と「折りてこそ：」の歌およびクセの詞章が『源氏物語』の本文よりも『源氏小鏡』等の梗概書の類に近いことを指摘する中心部分は、説得力があって面白かった。

黒田彰氏の二論考、「〈泰山府君〉と千秋万歳―桜町中納言譚をめぐって」(『芸能史研究』94、7月)と「咸陽宮覚書―朗詠注との関連」(『文学』3月)は、謡曲の素材となった説話そのもの

の考察で、ともに朗詠注との関連を指摘している。また同氏「〈砧〉小記―蘇武妻のこと」(『能楽タイムズ』1月)は、〈砧〉に先行し、〈砧〉が踏まえた故事と関連深い内容を持つ「蘇武妻譚」として『平家聞書』所載の説を紹介する。細川涼一氏「導御・嵯峨清涼寺融通大念仏会・〈百万〉」(『文学』3月)は、嵯峨大念仏会を始めた導御をめぐる母子再会譚と〈百万〉の関係を論じ、同曲成立の背景を探ったもので、ともに勉強になった。

「かんのう」連載の伊藤正義氏稿「〈船橋〉雑記」「〈難波〉雑記」「〈鶴〉雑記」(3・6・10月)は、〈難波〉が曲の構想についての論、他の二つは詞章制作の考察。『能楽タイムズ』の「汲水閑話」には、徳江元正氏の「星の祭をいそがむ」「三千人の人足」「張良一卷の書」(5・8・11月)もある。それぞれ〈関寺小町〉〈融〉〈張良〉の背景に触れる考察である。

謡曲詞章を精確に吟味する文学的研究の盛行と並行して、演出史の研究も盛んになっている。個々の作品研究に演出に関する考察が含まれる例が多いが、次に挙げる小田幸子氏の二論考は純粹に演出史を扱っている。「能の舞台装置―作り物の歴史」(『能楽研究』11、3月)は、作り物の歴史の変遷を、時代による能作の変化や各作者の作風の特徴と結び付けつつ考察した雄篇である。「修羅能の成立の変遷」(『芸能史研究』94、7月)は、古くは修羅能のシテの長絹着用例が少ない事に注目し、長絹使用の目的や効果を考察した上で、演出の諸問題にも触れる。両論とも演出史に着目する小田氏の一連の仕事の一つである。氏のように多くの資料を使って正確に叙述しようとする

るとくどくなる印象があるが、それは演出史研究にとつては不可欠のことであろう。都合のいい記事を一つ二つ並べても説得力がないし、結果だけ書いたのでは他人が同じ資料に基づいて判断できない。見過ごしそうな細かな記事を数多く集め、相互の食い違いなどを検討している内に見えてくるものもある。読む側がこうした形の論に慣れる必要があるようだ。修羅能出立論の最後の部分の、脚本内容と演奏形態の両方によって装束が決定される例としての〈簾〉の話が面白かった。全体的に出立の変遷をこつこつと追っていった結果として〈簾〉のような新見が次々と出て来るのであろう。小田氏は「能の型、能の装束―鬼出立の変遷」(『国文学』9月)で鬼出立についても考察しているが、他のジャンルにもその及ぶことを期待したい。

山中玲子「幕之内之習」小考(『鍊仙』10月)も演出に関する考察。手付の記事から、この習い事の実質が失われていたことや、揚幕の形態の変化を推定した。

梅若会がこの年に始めた「課題曲」のシステムは、実際の演能に結び付いた演出の研究を促進した。堂本正樹氏の報告「能の『演出』とその実際」が『能研究と評論』14(5月)に載ったし、小田氏が『梅若』に「生贄」について―演出を中心に(1月)、〈水無月祓〉の改訂をめぐって(7月)、〈自然居士〉の舟をめぐって(11月)を書いて、本文改訂の実態、作り物の利用の変遷など、各曲の古演出を解説している。古演出の研究と現代の能の演技がどう結び付き、学問的な正確さと舞台芸術としての完成度がどう折り合うか、難問が多いと思われるが、机上で資

料をいじっているだけでは分からない事が見えてくる利点はあるようである。「課題曲」の継続が望まれる。

能楽史研究は大作・小論とも充実していた。表章氏「北七大夫長能をめぐる諸問題(下の二)」(『能楽研究』11、3月)は58年以来の長大な論文の完結編。前稿までと同様に諸記録を博捜して、秀忠没後の七大夫の活動を明らかにした(第三節の四)後、同時代の記録、演能曲目、自筆書状等から、彼の芸風・役者像・人柄を推測して結ぶ(第四節)。秀忠没後も七大夫の地位は不動だったこと、正保年間に他座の大夫や嗣子が七大夫に習い事の教導を受けた例が多いこと、桑名での馬方殺害の後に一年半ほど活動不能であったこと等を論証し、寛永十一年の〈関寺小町〉事件については、「シタルクヲソキ」との悪評の背後に「重く静かに」という七大夫の演出意図を汲み取り、他座の役者の教導とも関連付けて、七大夫の演じ方がその後の能の芸質の変化―所要時間の長大化―に影響を与えた可能性をも指摘している。多くの資料の性格をきちんと見きわめた上で、七大夫という偉大な能役者の生涯を徹底的に追及しつつ江戸初期の能界の実情をも明らかにした本稿の完結は、江戸期能楽史研究にとってのエポック・メーカーと言えよう。

表氏には牛尾美江氏との共著の形をとる「関寺小町」演能史(一～四)(『観世』6～9月)もある。世阿弥や禅竹の伝書の記事や、室町末期から織豊期にかけての所演伝承を検討した後、天正四年から昭和六十年までの演能記録91例を列挙し、秘曲上演をめぐる環境や出演者についての考証を加えたもの。重く扱

われてきた同曲の演能史をたどることにも大きな意義があるうが、それを通して各時代の能界の状況が浮き彫りにされ、コンパクトな能楽史になっているのが有難い。

三ツ石友昭氏「宝生家の一俳人―宝生沾圃の閲歴を中心として―付・宝生沾圃略年譜稿」(『箕面学園高等学校創立40周年記念研究紀要』10月)は、俳人でもあり能役者でもあった宝生沾圃について、俳諧関係の資料を中心に調査し、『続猿蓑』成立との関わりを論じたもので、沾圃に関する俳諧研究の側の旧説を正し、資料から知り得る範囲での年譜を付している。彼が宝生古将監重友の三男であること等は能楽研究の側では周知のことであるが、同じく俳人の里圃を沾圃の能の弟子の山田市之丞と推定する新見が興味深いし、演能記録を含む年譜も便利である。

小林健二氏「江戸文化のなかの能―「やつし謡い」と一風の浮世草子」(『国文学』9月)は、西沢一風の浮世草子に見られる「やつし謡」の様相を紹介し、池田英悟氏「謡俳諧」五種と謡曲―江戸貞門俳人たちの作品より」(『中央大学国文』29、3月)は、謡俳諧に詠み込まれた曲名を分類検討する。どちらも江戸期の謡文化に関する考察である。

江戸能楽史に関する考察が並んだが、古い時代を扱った論に天野文雄氏「猿楽座の組織と機能をめぐる諸問題」(『芸能史研究』92、1月)がある。表氏の「大和猿楽の「長」の性格の変遷」(『能楽研究』2(4号)や「観阿弥清次と結崎座」(『文学』58年7月)での説に基づきつつ、より細かな検討を加えて空白を埋めようとした論。演能グループは座創立以来の乱舞グループが

翁グループとの従属関係を打破したもので、翁グループから分離・派生したものでも他からの加入でもないこと、長から棟梁の為手へと座の統率者が変わったのは毘沙王権守の時代(鎌倉中期)であろうこと等を指摘した後、長グループと乱舞グループの交流や権守の性格をめぐって推察する。全体の論旨に影響することではないが、『住吉神宮諸神事次第』の読みには疑問が残る。「上座輩少々」は、天野氏自身も「単に座の上層役者の謂とも考えられるが」と条件つきにしている通り、グループとしての「上座」と解する必然性は希薄なのではなからうか。それはともかく、翁猿楽や猿楽座をめぐる表氏の論文と、それに刺激されての天野氏の一連の仕事は、初期猿楽史研究の動向の大転換を象徴しているように思える。

小高恭氏「中世芸能史年表私稿1―応安―文安年間」(『大阪産業大学論集』60、10月)は、氏の既発表の芸能関係記事索引の主な記事をまとめて略年譜にしたもので、重宝である。続く時代の分も願いたい。

『鍊仙』にも能楽史関係の論考が見られた。天野氏「カйнаサン」私見(4月)は、諸資料に見える「カйнаサン」が(式三番)そのものことであると推定。表きよし氏「豊国神社祭礼猿楽について」(9月)は、『舜旧記』や能組の記事を検討して豊国祭の猿楽の実態を考察したもの。松岡心平氏「『迎陽記』に見える犬王」(1月)は、康暦二年(三〇〇)の犬王の勸進猿楽に関する記事の紹介。犬王の文献上の初出が二年遡ったが、後日の松岡氏の談話によれば、森末義彰氏著『日本芸能史論考』に当該記

事への言及があった由である(同書二三八頁)。

片桐登氏は『宝生』に「文明十年為誓願寺勸進能―觀世大夫、蟬丸・清重を演ず」(1月)、「大永二年春日社金剛大法楽能―宮王大夫始而付金剛」1・2」(3・4月)の他に、「尋ね人」シリーズとして「河原崎權之助・鼓打五十嵐二人・女房役者ちほ大夫・女房役者浮舟大夫」①(5・7・8・9月)を連載している。いずれも短編ながら、興味深く読んだ。

資料の翻刻・紹介にも有益なものが多かった。竹本幹夫氏の「由良家藏能笛手付『番笛集』解題と翻刻(一)」(『実践女子大学文学部紀要』28、3月)は、天正頃の内容と思われる笛頭付の翻刻。実際の演出を伝える手付類としては格段と古く、曲数も多い。今回は前半のみ。小林健二氏「資料紹介」大方家藏『能・狂言・舞等名寄』(『能研究と評論』14、5月)は、金春流の能名寄の他、狂言・面・幸若舞曲の名寄や書状を含む江戸初期資料の紹介。特に江戸初期の狂言名寄は他に類がなく、貴重である。落合博志氏「東京大学史料編纂所藏『四季祝言』について―紹介と考察」(『能楽研究』11、3月)は、従来知られていた觀世宗家本よりも原本の形を忠実に伝えている写本を発見し、全丁の写真を添えて翻刻し、觀世本との校異も付す。書写年代や伝来について推定した解説も詳細である。その他、山路興造氏「宇都宮二荒山神社式年造営芸能記録」(『芸能史研究』92、1月)や、

翻刻はないが永井猛氏作成の「宮島町立歴史民俗資料館蔵吉村氏寄託能楽関係文書目録」(『宮島の歴史と民俗』4月)もある。

資料紹介とは違うが、西野春雄氏「同名異曲考(一)」(『法政大

学文学部紀要』31、3月)は、謡曲の同名異曲を五十音順に挙げて甲乙等で区別し、内容・成立年代などを簡略に説明している。便利なものなので、続稿が待たれる。

能楽論研究は数が少ない。石黒吉次郎氏「世阿弥の能楽論と仏教」(『専修国文』38、1月)、佐々木美保氏「世阿弥能楽論における花と幽玄―『風姿花伝』から『花鏡』へ」(『日本文学』107、2月)、原田香織氏「花」「幽玄」から「妙花風」へ―世阿弥能楽論の一つの達成」(『文芸研究』112、5月)、稲垣安伸氏「『輕み』の論(三) 世阿弥の「安位」」(『日本文学研究』高知大』24、12月)等が管見に入ったが、題名からも推察できるように昔から繰り返されて論が多く、世阿弥の能楽論を扱った場合、解説の域を出る事が困難なようである。単行本の項に挙げた堂本氏の『世阿弥』にも彼の芸論に触れた部分が多いが、むしろそちらの読みの方に興味深い指摘が多いように思われる。

能関係の論考の展望の最後に、『国文学』9月号が「能・トータルメディアの生成」なるタイトルで組んだ特集に触れておく。巻頭の、山口昌男・松岡心平両氏の対談「トータルメディアとしての能」は、翁の問題、能と天皇制、会所や時宗と能との関連等について語る。「世阿弥・花・会所」(橋の会第20回公演パンフ)6月)なる小論を書いてもいる松岡氏の能に対する姿勢がはっきり出ている対談であった。また「現代批評の立場から」という群を立て、中村雄二郎氏「トポスと能―白山と立山にふれて」、磯崎新氏「能の舞台空間」、高山宏氏「象徴論と能―サイキック・ドラマとして」、土屋恵一郎氏「能、メタ・レベル

成されたかを一貫して考えつづける両氏の立場が明確に現れている。田口氏には『能楽タイムズ』の「汲水閑話」の、「一郎一郎万蔵万蔵」(2月)、「へいぐい」再検(7月)、「湯立という狂言」(9月)などの小論もある。「一郎…」は〈釣狐〉の秘事をめぐる考察、後の二つは天正狂言本に関するもの。

北川忠彦氏「〈鳴子〉と〈狐塚〉」(『女子大國文』100、12月)は、各流の〈鳴子〉とその類曲である〈狐塚〉について、多くの狂言本を網羅的に調査し、二曲の関係や演出の変遷を跡づけた論。従来あまり視野に入れられなかった鷺流と大蔵八右衛門派の本を精査したことが、手堅い論を生んだようである。

関谷俊彦氏「狂言師茂山久蔵英政伝一斑」(『関大國文学』62、2月)は、茂山家八代久蔵英政の遺した伝書・台本、および彼自身の伝記の考察。同氏「関西大学図書館蔵橋本賀十郎書写狂言台本について」(『関西大学文学論集』創立百周年記念特輯、11月)は資料紹介。永井猛氏「『祝本狂言集』のこと―近世初期の狂言台本」(『観世』6月)は、鴻山文庫蔵の狂言台本の紹介と考察。天正狂言本と虎明本・天理本との間に位置する好資料とする(翌年『能楽研究』12に翻刻)。

草深清氏「大蔵流狂言面と小瀬家文書」(『芸能史研究』95、10月)は、奈良市の旧家小瀬家が大蔵流の家元から預かった狂言面四種とその関係書類の紹介である。

狂言台本を資料とする国語学の論文として、小林賢次氏「大蔵流狂言台本における逆接条件表現―トモ・ドモからテモ・ガへの推移」(『言語と文芸』99、6月)が管見に入ったが、論評す

る力がまったくないので、題名を記するに留める。

以上、昭和六十一年1月〜12月の間に刊行・発表された能・狂言関係の図書と論考を概観した。紙幅の関係で採り上げることのできなかつたものもあるし、目につきにくい誌紙に掲載の分など見落しもあるうかと思われる。展望を書くほどの実力が伴っていないことはもとより自覚しており、表章所長に校閲を願って若干の添削をいただいたが、時間的余裕がなくて、書物・論考の選択は筆者の原稿のままである。脱漏の多からうことと、自己の興味に引き付け過ぎての偏った言及や論旨の読み違いなどが少なくないであろうことを恐れている。大方の御叱正を仰ぎたい。